

## 「見えない」テロリスト、「見える」テロリスト

*The Invisible Man* と *The Nigger of the "Narcissus"* における退化者の可視性\*

伊 藤 正 範

**Abstract** *The Invisible Man* and *The Nigger of the "Narcissus,"* both published in 1897, share in the description of Griffin and Donkin the typical image of degenerate terrorists widely-circulated through the popular news media. In the late nineteenth century, when Cesare Lombroso's theory of degeneration was most prevalent, terrorists as well as other types of criminals were the objects to be *visualized* while they assiduously devoted themselves to being *invisible*. However, there are some notable differences in the ways the narrative presents Griffin and Donkin, and by comparing them we will obtain a clue to recognize the two novelists' incompatible attitudes toward society. This article *investigates* how realist/journalist Wells and modernist/artist Conrad responded differently to the drive for visualization intrinsic in the *fin-de-siècle* middle-class England, which was obsessed with the fear for Continental anarchism and internal degeneration. I will then shed light on how both texts eventually present the prospect for degenerates to survive in the world so dominated by the inhuman language of degenerationism.

### 1. イントロダクション

19世紀末文学の再定義を目指すLinda Drydenが文学界における「分水嶺」と称する1895年、二人の新人小説家がイギリスに現れた。<sup>1</sup> *The Time Machine*で彗星の如く登場したH. G. Wells、*Almayer's Folly*でさほど目立たないデビューを果たしたJoseph Conradである。いわば文壇の「同期」とも言える二人は、その後、Wellsが*An Outcast of the Islands*(1896)を好意的に書評したのを皮切りに親交を深めていく。<sup>2</sup> やがてConradが*The Secret Agent*(1907)をWellsに捧げたのは、自然な流れであった。

この両者は、しかし、次第に関係を悪化させていく。その詳細な事情は知られていないものの、二人の文学的方向性のずれを指摘する声は多い。<sup>3</sup>

事実、芸術の排他性を否定し、Henry James と激しく対立した上、自らを「アーティスト」ではなく「ジャーナリスト」と言い切った Wells と、折に触れて独自の芸術論を展開した Conradとの間には、一見して明確なギャップが存在する。<sup>4</sup> さらにこうした二人の不和は、モダニズム運動の高まりとともに、より大きな潮流に包摂されていく。Virginia Woolf が、「エドワード朝作家」としての Wells を、「ジョージ朝作家」としての James Joyce や George Eliot から分離してみせると、旧態然としたリアリストとしての Wells 観は、後の文学批評史の主流を占めることになった。<sup>5</sup> その一方で、Woolf によって Joyce が比肩する作家として挙げられた Conrad は、その後、モダニストの草分けとしての評価を長く確立することになる。<sup>6</sup>

だが、近年においてリアリズムとモダニズムの歴史性が問い合わせ始めるにつれ、こうした二項対立的な作家観は修正を施されつつある。Carola Kaplan と Anne Simpson は、実際は Woolf が主張したほど「エドワード朝作家」と「ジョージ朝作家」の芸術的特質の差は大きくないと論じ (xi)、また Maria DiBattista は、Wells と James との論争や、Woolf によるエドワード朝世代への批判そのものに、当時のハイ・モダンとロウ・モダンの区分の曖昧さを見て取る (4)。さらにモダニズムの外にあるテクストを（「モダン」と「モダニズム」とを区別した上で）モダンの枠内で論じる必要性を説く Lynne Hapgood は、Wells の作品が、James のそれと並んで、ヴィクトリア朝的なリアリズムの語りを変える働きをしたと論じる (26-27)。<sup>7</sup>

とはいえ、こうした問い合わせ作業の中で、19世紀末文学の無意識的な均質化が進行してきたのもまた事実である。むしろ本論文が前提とするのは、作家の多様な社会観を映し出す不均質なメディアとしての小説テクストである。当時、急速に発展しつつあったジャーナリズムと芸術至上主義運動との狭間にあって、共に対極へと身を寄せていった二人の作家が、それぞれどのように異なる社会像を提示しているのかを、テロリズムや退化論などのファクターに着目しながら分析していきたい。Wells と Conrad を取り巻くモダニズム論の変遷を念頭に置きながらも、こうした問い合わせに向けての動きを一旦サスペンドし、両作品のずれが提示するステレオグラムの中に、モダンという時代における小説テクストの可能性を立体視することが、本論考の最終的な目的である。

## 2. ニつの世紀末小説と二人のテロリスト

デビューから 2 年後の 1897 年、Wells と Conrad はそれぞれ *The Invisible Man* と *The Nigger of the "Narcissus"* を出版する。自らの発明した透明薬によって悲劇的な結末を迎える科学者の物語と、イギリスへの帰途に就いた貿易船の波乱に満ちた航海の物語 — 出版年が同じという以外は一見して何の明確なつながりも見てこないこれら二つの作品であるが、実は、19 世紀末の社会文化を考察する上で重要な鍵となる一つのモチーフを共有している。それがテロリズムである。

1866 年、Alfred Nobel によって発明されて以来、テロリストたちが手にするダイナマイトは、現在もなおその破壊の痕跡を社会に刻み続けている。<sup>8</sup> 1880 年代のイギリスは、その最初期の恐怖にさらされた社会である。O'Donovan Rossa 率いるアイルランドのフェニアン運動が活性化した 1884 年から翌年にかけて、ヴィクトリア駅、警視庁、ロンドン橋などの公共建築物が次々に爆破され、特に 1885 年 1 月 24 日のウェストミンスターホール、国会議事堂、ロンドン塔をターゲットにした、今で言う同時多発テロは、白昼だったこともあって多数の負傷者とパニックを生みだした。

フェニアン運動そのものは 1887 年に活動を終息させるが、ダイナマイトの脅威は決して去ったわけではない。アナキストの「行動によるプロパガンダ」(propaganda of the deed) が最盛期を迎える 1890 年代になると、ヨーロッパ大陸では連日のように爆弾テロが起こった。ただ、この時期のイギリスがアナキストのターゲットとなる可能性はかなり低かった。というのも、アナキストに対する寛容政策のために、イギリスはいわば彼らの「避難所」とも言える場所になっていたからである。だからこそ、1894 年 2 月 15 日に起こったグリニッジパーク自爆事件は大きな衝撃を人々にもたらした。翌々日の *Pall Mall Gazette* の一面の社説に “Anarchists have agreed to let England alone, and that therefore Bourdin could not have desired to commit an outrage in London” (“Anarchism at Headquarters”) とあるように、犯人であり犠牲者であるフランス人アナキスト Martial Bourdin の犯意さえ疑われたほどであった。それほど「対岸の火事」の飛び火はイギリスに驚きをもたらしたのである。

言うまでもなく、Conrad の *The Secret Agent* は、この現実に起きた自爆事

件を下敷きにして書かれている。そしてアナーキズムに対する社会の関心の高さは、当時の他の小説にも反映されている。R. L. Stevenson, *More New Arabian Nights* (1885) や、G. K. Chesterton, *The Man Who Was Thursday* (1908) は、ロンドンの日常に潜伏するアナーキストたちに対する社会不安を忠実に反映しているし、E. Douglas Fawcett, *Hartmann the Anarchist* (1893) や、George Griffith, *The Angel of the Revolution* (1893) のように、アナーキストによる大規模なテロ攻撃の恐怖を描く大衆小説も多く出版された。<sup>10</sup>

こうした世紀の変わり目において、テロリズムの脅威とそれに対する社会不安は、ある意味、時代の原型的物語を構成していたと言えるかもしれない。というのは、*The Invisible Man* や *The Nigger of the "Narcissus"* のような、一見してテロリズムとは乖離したプロットを持つ作品においても、それらはテクストの中核に潜み、徐々に前面にせり出てくるからである。

*The Invisible Man* の冒頭、Iping に現れた Griffin は、宿のおかみに名も告げぬまま部屋を借り、自らが「実験に従事する研究者」("an experimental investigator") であり、「一人になる望み" ("a desire for solitude") を持つてこの田舎町に来たことを伝える (9)。大きなサングラスをかけ顔に包帯を巻いた人物がひたすら部屋に閉じこもる様子が、小さな町の話題を独占するのにそれほど時間はかかるない。やがて、彼が「変装したアナーキスト」("an Anarchist in disguise") であり、爆弾を準備している ("preparing explosives") のだという噂が立つ (20-21)。この憶測が次第に現実味を帯びていくのが、物語の後半、Griffin が大学時代の同胞である Kemp の家に偶然逃げ込み、それまでの経緯を明かすくだりである。

そもそも Griffin という人物は、田舎のカレッジで実験助手をしながら透明薬の完成に野心を燃やす駆け出しの科学者であった。貧困に追い詰められながら、また成果を盗もうとする指導教授の目をひたすら避けながら研究を続けるうち、ついに資金が底をついた Griffin は父親が他人から預かった金に手を出し、絶望した父親は自殺する。だが Griffin にとって周囲の世界は空虚なものにすぎない。自ら社会との接触を断ち、孤独を喜びとして実験器具が整えられた下宿部屋に引きこもっていく Griffin の姿はやがて、1880 年代、爆弾テロリズム最盛期に現れたアナーキストたちに酷似した姿を呈しあはじめる。

例えば、Mikhail Bakunin の “Revolutionary Catechism” (1871) には、テロリストのるべき姿として、社会とのつながりを絶ち、所持品も名前すらも持たない孤独な人間像が提示されている (Laqueur 29)。また、1881年にロンドンで開かれた国際アナキスト会議では、強力な「武器」を生み出すために、各々が化学や工業技術などを始めとした科学分野への造詣を深めなければならないという決議がなされた (Laqueur 51)。こうした爆弾製造に携わる科学者として実在した最も有名な人物は、フェニアン運動の指導者 Rossa と活動を共にしていた Mezzeroff である。1885年2月4日の *Pall Mall Gazette* には、業績のある科学者でありながらも、むしろ Rossa 以上に危険な人物として Mezzeroff が紹介されている (“Rossa’s Weapons of War”)。(こうした反社会性を燃らせるマッド・サイエンティストとしての爆弾犯のイメージは、*The Secret Agent* に登場する Professor の人物造形——彼もまた才能のある科学者でありながら孤独を好み、爆弾製造の器具がある部屋に引きこもる——によって完成されていくことになる。)

自らの身体を透明化することに成功した Griffin は、証拠隠滅のために、これまで住んでいた下宿の自室にガス管を引き込み、火を放つ。燃えさかるアパートを背に立ち去る彼の姿は、さながら爆弾テロを成功させたアナキストである。その後 Kemp に向かって「恐怖による支配」 (“Reign of Terror”) を打ち立てるのだと、あるいは「恐怖に陥れられた世界」 (“terrorized world”) を作り出すのだと宣言する Griffin は、(Kemp に裏切られながらも) 見せしめの殺人を通して文字通りのテロリストと化し、イギリス全土を震撼させていく (128, 133-36).<sup>11</sup>

他方、*The Nigger of the “Narcissus”* における「テロリスト」 Donkin は、その出自や思想において、当初からアナキストとしての特徴を呈している。その前に確認しておきたいのだが、そもそもこの小説は、海という人間を超えた脅威に立ち向かう船員たちの一体感や仲間意識をプロットの中心に据えている。Donkin という船員は、こうしたプロットの一貫性を浸食していく、ある意味、異端分子といつてもよい。

初登場の場面において、規律の厳しいアメリカ船から着の身着のままで逃げてきたという Donkin は、コックニーを操りながら、労働者としての自らの「権利」 (“right”) をことさら強く主張する (9-12)。そして物語後半に

至ると、病に伏す黒人船員 Wait を仮病と断じる船長に刃向かい、船員たちの暴動を煽りながら、士官たちに向けてビレーピンを放り投げる（123）。ビレーピンとは先端が膨らみを帯びたマッチ棒状の船具で、帆の操作に用いるロープを船体に固定するために、大小さまざまのものが船の至る所に配置されている。Donkin がしたように「右腕を風車のように振り回して」（“with his right arm going like a windmill,” 123）投げるほどの大きさであれば、殺傷すら可能な威力を持つであろうし、何よりもその形状は投擲用に握りを付けられた爆弾によく似ている。Jacques Berthoud の言葉を借りれば、Donkin とは労働者たちを煽動しながら、「飛び道具」（“projectile”）を手に管理階級に公然と挑みかかる「工作員」（“agent provocateur,” 36）に他ならない。<sup>12</sup>

語りが “The man who can't do most things and won't do the rest” (11) と描写する Donkin は、怠けることばかりに頭を巡らせる勤労忌避者であり、労働者として体制に抗うにはあまりに大義名分を欠いているかもしれない。<sup>13</sup> だがそれは、*The Secret Agent*においても引き続き見られる Conrad 流のアナキストのカリカチュアであり、そうした意味において Donkin は紛れもない19世紀末の爆弾テロリストなのだ。

### 3. 「見えない」テロリスト Griffin

さて、このように二つのテクストに潜伏する二人のテロリストであるが、彼らはその多くの共通項にもかかわらず、社会への「見え方」という点において決定的な相違を抱える。その相違を分析することは、両キャラクターが配置されている虚構社会のギャップを見出すことにつながるばかりでなく、後に道を違える二人の小説家の異なる社会観へと我々を導いてくれることになる。

まず、*The Invisible Man*におけるテロリスト Griffin は、頭のてっぺんからつま先まで「見えない」。今さら明記するまでもない事実であるが、それが Griffin という人物の社会とのつながりにおいて重要な要素となっていることは、一般に通用している「透明人間」という訳語を経由することによって見落とされてきた。タイトルに明示されているように（そして Griffin がたびたび自己紹介するように）、彼は「透明人間」（a transparent man）では

なく、「見えない人間」(an invisible man) なのだ。そして Griffin 自身も宣言するとおり、その「見えなさ」こそが彼に「力」を与える (“... An Invisible man is a man of power,” 48)。それは物理的な攻撃力のことではない。彼の身体が視覚をすり抜けられるという事実そのものが、テロリズムの本質と密接にリンクしながら、相手の心理に及ぼす力を増幅させるのだ。

例えば、Kemp に向かって「恐怖による支配」("Reign of Terror") への加担を促す Griffin は、「見えない人間」にとって最も有効な手立てが、無思慮の殺人ではなく、命令の書かれた「一切れの紙」("scraps of paper") をドアの下に滑り込ませることだと話す。それだけで、容易に社会を「恐怖に陥れ服従させる」("terrify and dominate," 128) ことができるうそぶく Griffin は、「見えない人間」が存在するという知識が人々の心理に与える重圧こそが、自らの力の本源であるということを十分に理解している。

19世紀末に現れたダイナマイトは、時限装置の発展と相まって、テロリストをこれまでになく「見えない」存在に変えた。1605年の火薬陰謀事件(Gunpowder Plot)において国会議事堂を爆破するのに必要と見積もられたのが36バレルもの火薬であったのに対し、世紀末のテロリストたちは同程度の爆発を鞠一つ分のダイナマイトで引き起こすことができた(Melchiori 2)。当時としては最大級の被害をもたらした1884年2月25日のヴィクトリア駅爆破事件——その後二年間におけるイギリスの爆弾テロ連鎖の幕開けとなった——においても、アナキストらしき人物は、乗客を装って荷物に偽装した爆弾を手荷物預かり所に預けている。<sup>14</sup> ダイナマイトの携行性と時限装置による遅延性が、テロリストを限りなく匿名化したのだ。

同年12月13日に発生したロンドン橋爆破事件の報道からは、さらにロンドンという都市の特異性がテロリストの不可視性を強めている様子が読み取れる。

It may be supposed that persons thus acting would be noticed; but those who know London and Londoners are well aware that on such a place as London Bridge there are always persons in the recesses, sometimes beggars, sometimes people who have taken too much to drink, sometimes curious peerers at the water beneath. On a Saturday night such loiterers would not be much noticed. By using a time-fuse, to which the evidence points, the criminals could escape

before the explosion took place. ("Attempt to Blow up London Bridge")

ロンドン橋の上にたむろする「乞食」、「酔っぱらい」、「川をのぞき込む者」たちに紛れて爆弾を仕掛けた犯人たちは、さらに時限装置のおかげでその場に不在のままテロリズムを実行できた。*The Secret Agent* の Professor がポケットに爆弾を忍ばせながらロンドンの群衆に紛れ込むように、当時のテロリストたちは、ダイナマイトという新しいテクノロジーがもたらす「見えなさ」を最大の味方につけて暗躍したのである。

こうしたテロリストとダイナマイトの不可視性が脅威として大衆に浸透する際に、無意識的に手を貸していたのがジャーナリズムである。後期ヴィクトリア朝とは、中産階級の目覚ましい躍進や労働者階級に対する学校教育の拡大、また印刷技術の向上や電信技術の普及、諸税の廃止と比例して、新聞の発行部数が飛躍的に伸びた時期でもあった (Lee 29-28, 46-49; Curtis 55-57)。特に、1860 年代から 1880 年代にかけて興ったニュー・ジャーナリズムと呼ばれる動きの中で、新聞は、読みやすくかつ扇情的・ゴシップ的なスタイルを獲得していく。こうした動きの先鋒であった *Pall Mall Gazette* が 1885 年 2 月に掲載した（前述の Mezzeroff の記事に付随する）各種爆弾のスケッチは、当時の新聞のセンセーショナリズムへの傾倒をよく表している (Fig. 1).<sup>15</sup> いわばニュースメディアを経由して、人々のダイナマイトに対する恐怖感は煽られていった。それはある意味、テロリズムとジャーナリズムの無意識的な共謀と言ってもよいものだったかもしれない。

それに対するジャーナリズム側からの冷静な警告も存在した。1883 年 4 月の *Spectator* は、（当時まだ本格的にイギリスには到来していなかつたが、新しい脅威として新聞紙面を賑わしつつあった）ダイナマイトが実際の被害以上に人々の恐怖心を喚起していることを指摘しながら、その原因の一つ目を「大量の人間が死ぬという思いが引き起こすショック」("the shock always produced by the belief that numbers must die")、二つめを「経験したことがない死に方というものが生み出す恐怖あるいは戦慄」("the special dread, or rather horror, created by unaccustomed modes of death")、三つ目を「ダイナマイトを操る人間の不在」("the absence of personality in dynamite") と分析する ("The Fear of Dynamite," 478)。その上でこの記事が最も力点を置くの

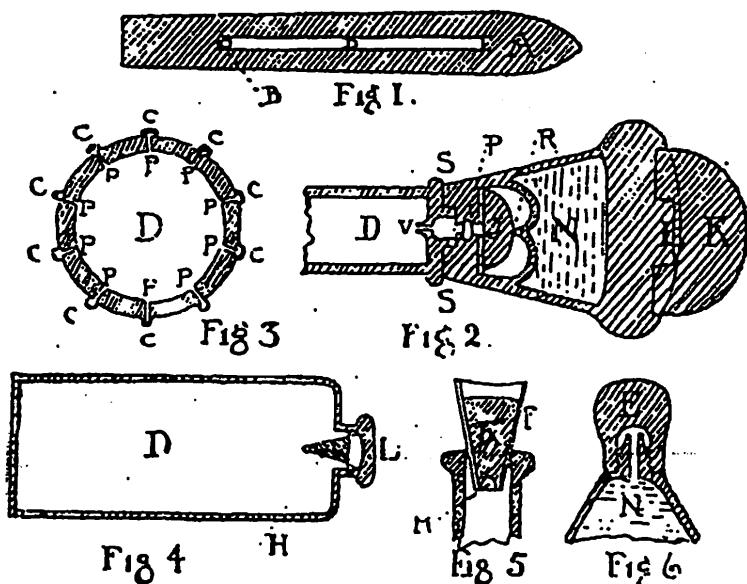


Fig. 1. Illustration from "Rossa's Weapons of War," *Pall Mall Gazette* 4 Feb. 1885: 4.  
© The British Library Board. 1865-1921 LON MLD28 NPL.

は、新聞を読む人間の「想像力」("imagination") の作用である。想像力を経由することで、テロリズムの「見えなさ」—「経験したことがない」という点においても、「人間の不在」という点においても—は、実際以上にその脅威を増幅するというのだ。こうした警告にもかかわらず、世紀末のイギリス社会は、たびたび仕掛けられるテロリストの爆弾に恐れと不安を募らせていくことになる。<sup>16</sup>

*Spectator* の記事が懸念を示しているのは、ダイナマイトが、その不可視性のゆえに、未知の脅威のシンボルとして容易に機能してしまうことである。もし社会の安定性がシニフィアンとしての「爆弾」とシニフィエとしての「力」との安定的な結びつきを通して保持されるのだとしたら（そしてそれこそが、実際の爆弾の無害さを冷静に指摘するこの記事が目論んでいるものである）、想像力の中で無限に増殖する「意味」こそが、テロリストの一文字通り「テロル (terror) をもたらす者」としての—力の源泉となる。いわば 19 世紀末のテロリズムは、無自覚的な共犯者としてのジャーナリズムを介して攪乱された記号の上に、自らを築き上げているのである。

とすれば、「見えない人間」Griffin もまた、まさに時代が生みだした記号

的なテロルに他ならない。「一切れの紙」("scraps of paper") を各戸に配布することによって実行されるという彼のテロリズムは、そもそも新聞 (paper) と近似したパブリシティーを前提としている。つまり、不可視の身体、すなわち不在のシニフィアンが、人々の想像力を媒介として無限にシニフィエを拡大・拡散させていくことによって、彼は絶大な力を得ることができるのだ。その意味で、「見えない」テロリスト Griffin は、まさにジャーナリズムの時代が生み出した怪物と言ってよい。

だが物語の終末、Griffin は、ジャーナリズムそのものが他方で内包する記号的衝動に取り込まれながら、悲劇的な死を迎えることになる。Griffin の恐るべき計画を聞かされた Kemp は、彼が屋敷を去るやいなや、彼を捕らえるべく行動を開始する。

Kemp's proclamation . . . was posted over almost the whole district by four or five o'clock in the afternoon. It gave briefly but clearly all the conditions of the struggle, the necessity of keeping the Invisible Man from food and sleep, the necessity for incessant watchfulness and for a prompt attention to any evidence of his movements. (134)

さながら夕刊紙のように（そして奇しくも Griffin が配ろうとしていた「一切れの紙」のように）、夕方までに地域全体に配布し終えられた Kemp の布告文は、「見えない人間」への対処法をまたたく間に流布する。それによつて、午前中には「恐怖」("a terror," 133) であった Griffin は、午後にはもう「目に見える敵」("a tangible antagonist," 134) として顕わにされてしまう。

そして群衆に追いかけられ、工夫が振り下ろしたスコップで激しく殴打された Griffin は、ついに絶命する。取り囲む人々の目の前に現れるのは異様な光景である。血管や骨、神経、やがて筋肉や皮膚が、最初はおぼろげに、そして徐々に形をはっきりとさせながら見えはじめるのである。最後に現れるのは一人の裸の人間の姿だ。

When at last the crowd made way for Kemp to stand erect, there lay, naked and pitiful on the ground, the bruised and broken body of a young man about

thirty. His hair and beard were white,—not grey with age but white with the whiteness of albinism, and his eyes were like garnets. His hands were clenched, his eyes wide open, and his expression was one of anger and dismay. (152)

大衆の眼前に出現した剥き出しの身体は、これまでとは打って変わって雄弁に語り始める。Griffin の年齢、アルビノであるという事実、そして怒りと狼狽を抱えながら惨めに死んでいったことを。不可視であるがゆえに無制御のまま意味を拡大・拡散させていった記号としての身体は、ここでその放縱性を回収され、意味との間の距離を劇的に縮める。「見える」ようになった身体は、もはや想像力を経由することなく、忠実に「見たままの」事実を伝えはじめるのだ。そこにテロルが介在する余地はもはやない。

こうした可視化への衝動は、19世紀末のジャーナリズムが他方で抱えていたオブセッションの一つであった。それは *The Invisible Man* の内部においても確認することができる。浮浪者の Marvel は、Iping で騒ぎを起こして逃走中の Griffin に捕まり、力ずくで命令に従わされるのであるが、隙を見て逃げ込んだ港町で驚くことになる。一息ついているところに話しかけてきた一人の老水夫が、つい先刻まで Griffin と共にいた Marvel すら知り得ない「見えない人間」についての情報を——騒ぎの顛末や友人がいないという事実までも——Marvel に子細に語って聞かせるのだ。そんな老水夫が手にしているのはその日の朝刊である (65-68)。また、逃げ込んできた Griffin が寝ている間に、戸惑う Kemp が手を伸ばすのも同じ日の朝刊である。老水夫が Marvel に話して聞かせたのと同じ記事を通して、Kemp は、Griffin 自身の語りを待たずして事の詳細を知ることになる (86-87)。このように、突如として田舎町を襲った「見えない人間」の情報を、新聞は異様なスピードをもって大衆の眼前にさらけ出していく。

そもそもそうした可視化衝動は、増加する犯罪に直面した 19世紀末の社会に深く入り込んでいた。一例を挙げれば、ロンドンにおけるテロ事件の多発に頭を痛めた警察は、「見えない」テロリストを照らし出すために、ガス灯が主流であった時代に、屋外の電気照明をいち早く取り入れるなどした (Melchiori 1)。ニュー・ジャーナリズムの先鋒ともいえる *Illustrated Times* や *Illustrated London News* などのいわゆる絵入り新聞が人気を博していく

のは、技術革新に伴うイラストの多用と、暗闇に潜む犯罪を可視化しようとする社会の欲求とがうまく合致したからに他ならない。<sup>17</sup>

*Pall Mall Gazette*（絵入り新聞ほどではないが当時としては比較的図版を多用した）の1885年2月10日号は、こうした可視化衝動をよく表している（Fig. 2）。Harry Burtonというアナリスト（ウェストミンスターホール等の同時爆破テロにおける実行犯の一人と目される人物）のイラストが添えられた記事本文は、その横顔のスケッチを“*He has high cheek bones, with a somewhat receding chin and forehead*” (“The Dynamite Outrages”) と説明する。こうした「高い頬骨」、「後退した顎と額」という語彙が想起させるのは、（*The Secret Agent* の Ossipon が信奉するあの）19世紀末のイタリアの犯罪学者 Cesare Lombroso である。観相学（あるいは骨相学）を自らの犯罪者論に援用した Lombroso は、先祖返り（atavism）と呼ばれる顔の奇形がその持ち主の退化（degeneration）——すなわち犯罪者としての生来的な堕落——を表しているという前提に立ち、退化者としての犯罪者の分類を統計学的に試みた。主著である *Criminal Man* には、傾斜した額、肥大化した頬骨、そして小さく後退した顎が、犯罪者の顔の特徴として列挙されている（12-17）。これらの「奇形」はいわば「見える」記号であり、Lombroso の退化論とは、犯罪者的性向という本来「見えない」はずのものをそこに直結させ



Fig. 2. Harry Burton, illustration from  
“The Dynamite Outrages,” *Pall Mall Gazette*  
10 Feb. 1885: 9.  
© The British Library Board. 1865-1921  
LON MLD28 NPL.

ようとする試みに他ならない。Burton のイラストつき記事の背後にあるのは、「見える」記号を通して暗闇に隠れ潜む犯罪を（電気照明さながらに）大衆の眼前に照らし出そうとする、19世紀末の社会的言説なのだ。<sup>18</sup>

*The Invisible Man* の終幕における Griffin の可視化とは、すなわち記号としてのテロリストの身体の可視化に他ならない。「見えない」シニフィアンは大衆の眼前で可視化され、拡大していたシニフィエとの間の距離を一瞬にして収縮させる。テクストは、ジャーナリズムと社会とが共有する可視化の欲求を充足しながら、犯罪という脅威を手際よく回収し、乱された社会秩序を回復してみせるのである。こうして「ジャーナリスト」Wells の生み出した「見えない」テロリストは、群衆の凝らされた視線を前にその最期を迎える。

#### 4. 「見える」テロリスト Donkin

では、「モダニスト」Conrad が生み出すテロリストは、どのような道を辿るのだろうか。*The Nigger of the "Narcissus"* の「爆弾投擲者」Dónkin は、打って変わって「見える」テロリストである。初登場時、語りは彼の顔（身体）の奇形をさまざまと描き出す。

His ears were bending down under the weight of his battered felt hat. . . . His neck was long and thin; his eyelids were red; rare hairs hung about his jaws; his shoulders were peaked and drooped like the broken wings of a bird. . . .  
(9-10)

彼の（帽子の重みで垂れ下がるほど）大きな耳、細く長い首、まばらな額髭、鳥を想起させる肩が、Lombroso によって提示されている退化者の徵候に一致することは明白である。<sup>19</sup> すなわち Donkin の顔は、登場と同時に、その持ち主が「退化者」であることをあからさまに示すのである。

だが、物語が終盤にさしかかるにつれて、Donkin は Griffin とはまったく別の力を身につけ始める。その前に確認しておかなければならないのだが、実はこの小説には、「見える」Donkin とは対照的に（そして Griffin と同じように）、「見えない」身体を持つキャラクターが登場する。それが黒人船員 Wait である。出航を控えての夜間点呼の最中に遅れて乗船してきた Wait

の描写は、端からその不可視性を際立たせる。暗闇の中から自らの名前を叫んだ Wait は、それを字義通りに受け取った点呼中の一等航海士 Baker が憤然とする中、船員達の前にその姿を現す。

The lamplight lit up the man's body. He was tall. His head was away up in the shadows of lifeboats that stood on skids above the deck. The whites of his eyes and his teeth gleamed distinctly, but the face was *indistinguishable*. (17; emphasis added)

ランプの明かりに照らし出された顔は、その白い目と歯だけを輝かせながらも、何故か「判然としない」。それもそのはず、表題にある「黒ん坊」の全身は、白い目と歯を残しただけで背後の暗闇にすっかり溶け込んでしまっているのだ。

この「見えなさ」をもって、Wait は次第に船中における支配を獲得していく。船員達が歓談する部屋の戸口から突き入れられた黒い顔は、やはりその目だけを残して背後の闇に紛れ込み (“In the blackness of the doorway a pair of eyes glimmered white”)、発散する「黒い霧」をもって船員達の心に陰鬱なプレッシャーを与えるながら (“a black mist emanated from him; a subtle and dismal influence”)、彼らを「暴君」の前に立つ「奴隸」のように恐れおののかせる (“like a sick tyrant overawing a crowd of abject but untrustworthy slaves,” 34-35)。やがて彼は「船を影のように覆い」 (“He overshadowed the ship,” 47)、「黒い偶像」 (“a black idol,” 105) として船員達の心理に君臨するようになる。こうした彼の魔力を生み出すものこそが、他ならぬ「見えない」記号とその意味との乖離である。「黒」あるいは「影」としての身体は、その不可視性ゆえにシンボルと化し、単なる黒人の身体を超越した意味を産出しはじめるのだ。だからこそ語り手を含めた船員たちは、結果的に Wait を「偶像」として神格化してしまう。<sup>20</sup>

だがそうした中で、Donkin だけがこの不可視の身体の呪縛を打ち破る力を獲得していく。最終章において、病で憔悴しぶeddに横たわる Wait の部屋を訪れた Donkin は、Wait に対して身勝手な怒りを覚え始める。

[Wait] was very quiet and easy amongst his vivid reminiscences which he

mistook joyfully for images of an undoubted future. He cared for no one. Donkin felt this vaguely like a *blind man* may feel in his darkness the fatal antagonism of all the surrounding existences, that to him shall for ever remain *irrealisable*, unseen and enviable. He had a desire to assert his importance, to break, to crush; to be even with everybody for everything; to *tear the veil, unmask, expose*, leave no refuge—a perfidious desire of truthfulness! (149-50; emphasis added)

自らの死を目前にしながらも超然と希望あふれる未来を思い描く Wait に対して、Donkin は、「盲目の者」が「暗闇の中」で、周囲を取り囲む「目に見えない」全存在に対して感じるような敵意を抱く。そして「ベールを引きちぎり」、「覆いを外し」、「顕わにする」ことをしきりに望む Donkin が、この後、視覚的なイメージを通して Wait を打ち負かしていくことを見逃してはならない。

数節の後、Donkin は（彼こそが Wait の病を利用して船上の反乱を煽動した張本人であるにもかかわらず）Wait がそれまでふるってきただけの権勢を激しく非難すると、怒りの言葉を吐き続ける Wait に「探るような注意深い視線」（“a scrutinising watchfulness,” 151）を向ける。その瞬間、Donkin の目に映るのは、それまでとは異なった様相の Wait である。

Donkin, as if fascinated by the dumb eloquence and anger of that *black phantom*, approached, stretching his neck out with distrustful curiosity; and it seemed to him suddenly that he was looking only at the shadow of a man crouching high in the bunk on the level with his eyes. (151; emphasis added)

Donkin の視線にさらされた「黒い亡霊」に、もはや船員達を支配してきたようなシンボリックな神秘性はない。それは Donkin の「目と同じ高さにある」単なる「人間の影」にすぎないので。「見えない」記号は、Donkin の眼力を通してその実体を見抜かれ、氾濫する意味は急速に収縮する。単なる「影」へと還元された Wait の身体に、もはや Donkin の横暴を止めるだけの呪力はない。死にゆく Wait を尻目に、Donkin は衣服箱に入っていた金を盗んで立ち去る。それは彼の「勝利」（“triumph,” 154）の瞬間である。

ちなみに、この場面において Donkin の目に映る Wait の顔とはどんなものだったのだろうか。章の冒頭に遡ると、死期が迫る Wait の顔を、語りはこのように描写している。

He was becoming immaterial like an apparition; his cheekbones rose, the forehead slanted more; the face was all hollows, patches of shade; and the fleshless head resembled a disinterred black skull, fitted with two restless globes of silver in the sockets of eyes. He was demoralising. (139)

ほお骨が隆起し、額が傾斜しゆく Wait の顔は、まさに「退廃」する彼の内面を映し出す鏡であり、視覚化された退化の痕跡に他ならない。つまり、死に際の Wait の顔から「ベールを引きちぎる」ことに成功した Donkin の視線は、まさに 19 世紀末の社会やジャーナリズムが共有していたのと同種の可視化衝動を内包しているのである。

ここに解消不能な矛盾が発生する。なぜなら「テロリスト」Donkin こそが犯罪者であり、こうした視線の対象となるべき退化者だからである。そのあからさまな「先祖返り」の容貌をもって端から可視化されているかに見えた Donkin は、逆説的に可視化の力を自ら操り、退化者の烙印を負いながらも Wait という虚ろな権力を打ち負かすことに成功する。*The Invisible Man* において「見えない」テロリストが「見える」ようになるのとは異なり、*The Nigger of the "Narcissus"* では「見える」テロリストが「見る」ことを覚えていく。ここに 19 世紀末という時代を捉え、社会やジャーナリズムに深く浸透していった可視化願望に対して、「モダニスト」Conrad が提示するアンチテーゼがある。Conrad 独自の芸術論として名高い序文において宣言されているように、*The Nigger of the "Narcissus"* を通して彼はまさに我々に「見せて」("make you see!") くれるのだ。我々が「問い合わせてきた真実」("truth for which you have forgotten to ask," xlvi) を。<sup>21</sup>

## 5. 退化者と社会

このように「ジャーナリスト」と「モダニスト」によって提示された二人のテロリストは、可視性と可視化というヴィクトリア朝末期の命題が作り上げる座標において、全く異なる交点を占める。それは最終的に、二人

の退化者の社会との関わり方を、ひいては二人の作家の社会観を我々に示してくれる。

アパートに引きこもり、ひたすら透明化の研究に打ち込む Griffin は、ある夜、夢を見る。周囲のものが霧のように消えていき、ついには彼自身が立っている地面まで消えていく夢である（98）。そしてできあがった透明薬を飲み、逃げ込んだデパートで眠り込む Griffin は、誰にも気づいてもらえぬまま墓に生き埋めにされていく夢を見る（113）。*The Invisible Man*において、「見えなく」なるということは、社会とのつながりを喪失することでもある。裏を返せば、Wells の虚構世界においては、可視の（すなわち安定した）記号としての身体を通してのみ人間は社会に接続されうるのだ。ゆえに、「見えなく」なることで「自由」や「力」が手に入るという Griffin の「壮大なヴィジョン」（“a magnificent vision of all that invisibility might mean to a man,—the mystery, the power, the freedom,” 93）は、様々な現実を経るうちに、「文明都市」において「見えない人間が無力でばかげたものである」（“I realized what a helpless absurdity an Invisible Man was,—in a cold and dirty climate and a crowded civilized city,” 124）という認識に変わっていく。群衆の面前で顕わになった Griffin の身体は、ついに社会とのつながりを回復しないまま最期を迎えた一人の孤独な退化者の骸に過ぎない。

対照的に、*The Nigger of the “Narcissus”*においては、その誰にでも「見える」身体を通して社会のつまはじき者（退化者）として決定づけられるはずのスラム出身者 Donkin は、逆説的に「見る」力を身につけることによって資本主義社会との接点、すなわち貨幣を手にする。確かに彼は、荒海を進む Narcissus 号という共同体においては、連帯感（solidarity）を乱す異端者でしかない。だがそれはあくまでも長期航海中の船という、現実社会から隔離された空間においてのみのことである。船はイギリスに近づくにつれ、次第に非現実性を帯びていく（“the ship appeared pure like a vision of ideal beauty, illusive like a tender dream of serene peace. And nothing in her was real,” 145）。そして接岸と同時に Narcissus 号がその「生を終える」（“ceased to live,” 165）と、突如として流れ込んでくるのは容赦のない階級社会の現実である。

A toff in a black coat and high hat scrambled with agility, came up to the second mate, shook hands, and said:—"Hallo, Herbert." It was his brother. A lady appeared suddenly. A real lady, in a black dress and with a parasol. She looked extremely elegant in the midst of us, and as strange as if she had fallen there from the sky. Mr. Baker touched his cap to her. It was the master's wife. And very soon the Captain, dressed very smartly and in a white shirt, went with her over the side. (165)

一等航海士 Baker の眼前を通り過ぎていくのは、「紳士」の装いをした二等航海士 Creighton の兄と、「本物の貴婦人」である船長の妻、そして「身なりをきちんと整えた」船長自身である。だが Baker を迎えるものはない。母と漁師をしていた父と二人の兄弟はすでに他界し、妹が嫁いだ町一番の仕立屋であり政治家である夫は、船乗りの Baker のことを「立派な」("respectable") 親類とはみなしていない (165-67)。

下船した他の船員達もまた、階層社会の現実に絡め取られていく。「黒い一団」("dark group") となった彼らが歩く通りの横には、造幣局の建物が光に洗われながら「眩しく白く」立ち現れる ("the stained front of the Mint, cleansed by the flood of light, stood out for a moment dazzling and white like a marble palace in a fairy tale," 172)。船という非現実において「黒」という「見えない」シンボルにいともたやすく支配された彼らは、今度は現実社会において「白」にシンボライズされる貨幣経済のヒエラルキーに、気づかぬうちに嵌め込まれてしまっているのだ。

しかし Donkin は違う。Wait から奪った金で身なりを整えた Donkin は、陸で仕事をするつもりだと告げ、酒の誘いを断った船員達に「働いて飢え死にでもしろ」("Work and starve!" 170) と言い残すと、ロンドンの街路に消えてゆく。船という非現実世界の連帯感を引きずり、そびえ立つ貨幣経済の象徴に盲目のまま労働者として「働き」続ける船員たちとは対照的に、「見る」力を手に入れ、そして金を手に入れた退化者 Donkin は、階級社会の容赦ない現実をすり抜けながら狡猾に生き続ける。この意味において Donkin のテロリズムは完成を見ているのかもしれない。彼こそが、階層社会を強固に支える記号の神秘に挑むべく、「モダニスト」Conrad によって社会に投げ入れられた爆弾なのだ。

そしてこれまでの分析を通して、社会が可視化によって秩序維持・回復を図る様を忠実に再現しているかに見えてきた「ジャーナリスト」Wells であるが、実は、彼もまた「モダニスト」たりえる爆発物を最後の最後に付け加える。当初の連載版には含まれていなかったエピローグがそれである。そこでは、浮浪者 Marvel が、Griffin から逃げる際にこっそり持ち逃げした金で、“The Invisible Man”という名のインを開業している様子が描かれる。そして毎夜、Marvel は、鍵のかかった戸棚から三冊のノートを大事そうに取り出しては、ジンのグラスを片手に、パイプを吹かしながらページをめくり始めるのである。

His brows are knit and his lips move painfully. ‘Hex, little two up in the air, cross and a fiddle-de-dee. Lord! what a one he was for intellect!’

Presently he relaxes and leans back, and blinks through his smoke across the room at things invisible to other eyes. ‘Full of secrets,’ he says. ‘Wonderful secrets!’

‘Once I get the haul of them—Lord!

‘I wouldn’t do what *he* did; I’d just—well!’ He pulls at his pipe. (154)

このノートこそが、Griffin がすべてを犠牲にして完成させた研究成果を暗号で記したものであり、彼の死後、警察が必死に所在を探しても見つからないままになっていた「見えない人間」の秘密のいわば核心である。だが文盲のため新聞すら読めない Marvel に、もとより暗号などわかるはずがない。「他人の目には見えないもの」に向かって目をしばたかせながら「秘密がいっぱいだ」とつぶやく Marvel は、いつかその「秘密」を解読し、有効活用することを夢見ながら、またノートを鍵のかかった戸棚に戻す。こうして Griffin によって — さながらギリシャ神話の黄金を守る怪物グリフィンのように — 守られてきた三冊のノートは、新たな守り手を得て、隠され続ける。もし Griffin の力の源泉が、記号としての身体を隠蔽することにあったのだとすれば、ノートの暗号もまた隠蔽された記号に他ならない。こうして、「見えない人間」の謎を一分の隙なく白日のもとにさらけ出そうという警察の思惑とは裏腹に、「見えない」記号はテクストに残留し続ける。

では、この Marvel とはいったい何者であろうか。その登場時、彼は Griffin

とは対極にある顔を見せる。「饒舌でよく変わらる表情、円筒状に突き出た鼻、酒好きそうでふくよかなよく動く口、風変わりなもじやもじやの鬚」(“copious, flexible visage, a nose of cylindrical protrusion, a liquorish, ample, fluctuating mouth, and a beard of bristling eccentricity,” 43)を持った彼の顔は、いわば Griffin の身体とは対照的なよく「見える」記号である。それは「驚き」を表し (“Marvel's face was astonishment,” 47)、「不安」を表し (“His mottled face was apprehensive,” 50)、「驚きと疲労」を表し (“His rubicund face expressed consternation and fatigue,” 62)、「絶望」を表し (“his eyes were eloquent of despair,” 62)、「痛み」を表し (“His face was eloquent of physical suffering,” 68)、「惨めな恐怖」を表す (“the abject terror on his perspiring face,” 72)。「見えない」ことによって記号と意味のつながりを攪乱する Griffin の身体とは異なり、Marvel の顔は、継続的に安定した意味を供給する「見える」記号なのだ。

かつて施し物の靴を履いていた浮浪者 Marvel は、Lombroso 的な分類においては紛れもない退化者であろう。が、インの経営者へと立身出世を遂げた彼は、*The Nigger of the “Narcissus”* の退化者 Donkin と同様、階層社会の階梯をすり抜けていける可能性を示している。記号の可視性と安定性によって支えられた社会のヒエラルキーを、「見える」記号としての身体を抱えた退化者が、逆説的に「見えない」記号の守護者となりながら自在に横断していくのだ。テロリストの死という本来のエンディングに回収されたはずの記号の不可視性は、こうして退化者の可視性の下で人知れず息を吹き返し、退化者が階層社会の過酷な現実を回避しながら生き抜いていく可能性を指し示す。Wells によって付け加えられたエピローグと、そこで描かれる Marvel こそが、可視化へと突き動かされる社会——そして自らの作品そのもの——に Wells が投じた爆弾なのだ。

かくして「ジャーナリスト」Wells は、「モダニスト」Conrad へと接続されていく。鍵のかかった戸棚に暗号ノートを隠す Marvel が、さらに、(Wells に捧げられた) *The Secret Agent* で南京錠のかかった戸棚に爆弾を隠す Professor——彼自身もまた「先祖返り」した身体を抱える退化者である——へとつながっていくことを論じるには、もはや余白がない。だが、イギリス全土が「見る」ことに取り憑かれた 19 世紀末というジャーナリズムの時代

において、Wells と Conrad が生みだしたテロリストたちは、社会に対する二人の「アーティスト」のテロリズムを、それぞれ独自のやり方で実現している。やがて訪れるハイ・モダニズムの時代を前にして、*The Invisible Man* と *The Nigger of the "Narcissus"* は、生みの親を違えた双子のテクストとして、我々にモダンという時代における言語芸術の挑戦を垣間見させてくれるのである。

## 注

・本論考は 2008 年 11 月 15 日のコンラッド研究会月例会にて口頭発表した原稿に、大幅な加筆修正を施したものである。

1. Dryden は、1895 年という年が、H. G. Wells の登場に加え、Oscar Wilde の破滅、Thomas Hardy の詩作への転向、「新しい世代」の台頭への不平を述べる Henry James の書簡の送付などのさまざまな転機的事実に彩られていることを指摘する (147)。
2. 二人の交流は手紙のやり取りから始まり、共に Kent に移り住んだ 1898 年以降は、互いに自宅を訪れるようになる (Smith 161-67; MacKenzie 140-43)。Conrad 自身も Wells の作品を高く評価していた (Baines 231; Najder 243)。An Outcast of the Islands に対する Wells の書評については Sherry 73-76 参照。
3. Baines 232-33、Smith 167 参照。後年 Conrad が Wells に送った書簡では、「人間性」(humanity) の扱いを巡って、自らと Wells が根本的に異なることが宣言されている (Baines 232)。Baines は、Wells の Boon (1915) における Conrad 批判を二人の不和の一因と見ている。
4. Henry James との論争については MacKenzie 290-94、Delbanco 137-79、Costa 79-99 参照。文学の社会における実用性を強調する Wells は、人間性探求における芸術の「力と美」を主張する James と対立を深める中、1915 年の書簡において “I had rather be called a journalist than an artist” と宣言する (Edel and Ray 264)。
5. Woolf は、Wells が (Bennett や Galsworthy と並んで) 因襲的な形態から脱しきれていない点を強く批判した (“Mr. Bennett and Mrs. Brown” 326)。また「人生」(“life”)を描き切っていないとして Wells をやり玉に擧げる一方で、Joyce をモダンの作家として称えている (“Modern Fiction” 104-5, 108)。Patrick Parrinder

が“the growth of modernism in the arts after 1912, with the emergence of Joyce, Lawrence and Virginia Woolf as novelists, was the major force which led to the repudiation of Wells's methods and influence”(24)と論じるように、モダニズムの発展と反比例するように Wells はその評価を下げていった。

6. Woolf, “Modern Fiction” 107 参照。Conrad の形式面における革新性やモダニズム性についての初期の議論については、Miller, “Interpretation” 220、Watt 359、Jameson 206, 219、Brooks 238, 261 参照。ちなみに F. R. Leavis は、*The Great Tradition* の中で、Wells の作品が単なる “the discussion of problems and ideas” に過ぎず、George Eliot、James、Conrad などの “the great novelists” の作品との間に根本的な相違を抱えていると論じた (16)。
7. 他にも、Nicholas Daly は、ハイ・モダニズムと大衆路線との間にそもそも大きな断絶はなかったとする議論の中で、“proto-modernist” に位置づけられるべき作家として James と Conrad に加え（迷いつつも）Wells を挙げている (3)。ちなみに、モダニストとしての Conrad 観も当初から確立していたわけではなかった。D. H. Lawrence は、彼を「廃墟の中の作家」 (“Writers among the Ruins”) に数え、Conrad を評価した Woolf 自身ですら、Conrad が外国人であるという理由で、時代を代表する作家から除外している。Anderson 159、Woolf, “Mr. Bennett” 326 参照。Linda R. Anderson が指摘するように、1960 年代後半以降のポスト構造主義の流れにおいて、Conrad の初期モダニストとしての評価がようやく定着した (159)。
8. 興味深いことに、OED における “terrorist” の（現在の意味での）初出が、ダイナマイト発明と同年の 1866 年である。
9. ロシア大使 Vladimir が、アナキストへのイギリス警察の取り締まりを強化させるためにニセの爆破テロを画策する部分も、当時のヨーロッパ諸国がイギリスの寛容政策に対して抱いていた苛立ちを反映している。
10. 中でもやはり Conrad のアナキズムに対する関心は群を抜いていると言えるかもしれない。長編では *The Secret Agent* に加え、*Nostromo* (1904)、*Under Western Eyes* (1911) が、短編では “The Informer” (1908)、“The Anarchist” (1908) が、それぞれアナキズムや革命運動をプロットの中心に据えている。他方 Wells に関しては (Conrad ほど明確ではないものの)、Alex Houen が論じているように、*The War of the Worlds* (1898) におけるイギリス社会の荒廃にテロリズム的要素を見ることができる (32)。また “The Stolen Bacillus” (1895) という短編には「細菌テロ」を目論むアナキストが登場する。
11. Dryden は、Griffin が「19 世紀末のテロリスト」であり、この小説が当時の「都市的な不安」である群衆のパニックやテロリズムを主題にしていると主張する

(170-71)。

12. Berthoud が “National Socialist” と定義づけるように、船員の労働者としての権利を声高に主張する（そして外国人船員に侮蔑的な声を投げつける）Donkin は、正確にはテロリストというよりも（人種的偏見を伴った）社会主義者と言ったほうが適切かもしない。（Donkin の人種主義と外国人嫌いに関しては Shaffer 55 参照。）他方、Walter Laqueur が述べるように、アナーキスト、社会主義者、ニヒリストの間に線引きをすることは当時一般的ではなかった（14）。また、1885 年 1 月のロンドン同時多発テロの直後にシカゴで開かれた社会主義者の集会において、事件が賞賛されたこと、ダイナマイトの使用が推奨されたことが、当時の新聞に報じられている（“The Outrages Applauded by Socialists”）。
13. イギリス人としての Donkin は、当時、問題となっていたイギリス人船員の質の低下を色濃く反映していると思われる。当時の海洋雑誌 *Fairplay* には、奇しくも Donkin という名の船主が、外国人船員を積極的に雇用するようになった他の船主たちに対して、「イギリス人船員を優先するよう」（“to give the preference to British sailors,” “Foreign Sailors in British Ships” 142）呼びかけている様子が記載されている。
14. 「乗客、あるいは乗客と思われる人物」（“The passenger, or presumed passenger”）が荷物を預ける様子は、2 月 27 日の *Pall Mall Gazette* において詳しく報道されている（“The Dynamite Explosion at Victoria Station”）。
15. Harry Schalck は、ニュー・ジャーナリズムの嚆矢として *Star* と *Pall Mall Gazette* の二つの夕刊紙を挙げる（109）。特に後者は W. T. Stead が編集長を務めていた 1883 年から 1889 年にかけて、その過激なセンセーショナリズムで部数を飛躍的に伸ばしていった（Koss 262; Boston 91）。
16. 1890 年代には、大陸で頻発する爆弾事件が、人々にありもしない巨大な国際アナーキスト組織の存在を幻想させたりした（Laqueur 14）。
17. 当時の絵入り新聞の発達とニュー・ジャーナリズムとの関連については Lee 129 参照。こうした傾向は、1888 年の「切り裂きジャック」事件を通して特に顕著になっていました。
18. アナーキストもまた紛れもない Lombroso の分析の対象であった。折しもヨーロッパ大陸における爆弾テロ全盛時代、著書 *Gli anarchici* (1894) において退化者としてのアナーキスト論を展開している。
19. 顔から突き出るほどの Donkin の巨大な耳は、後に蝙蝠の翼にも喩えられる（“His big ears stood out, transparent and veined, resembling the thin wings of a bat,” Nigger 110）。*Criminal Man* において、Lombroso は、犯罪者の耳の 28% がチンパ

ンジーのように顔から突き出るほど大きく（14）、しばしば頸髄が極端にまばらなこと（18）を指摘する。また、Donkin の顔が「鳥のような輪郭」（“fowl-like profile,” *Nigger* 110）を持っている点や、その丸めた肩と尖った鼻が「羽毛を逆立てた病気の禿鷲に似て」（“resembled a sick vulture with ruffled plumes,” *Nigger* 128）いる点なども、Lombroso の理論と合致する。*Criminal Man* では、犯罪者の鼻が「しばしば猛禽類のくちばしのようにかぎ型になっている」（“it is often aquiline like the beak of a bird of prey,” 15）ことが主張されている。ちなみに Conrad が実際に Lombroso の著作に直接触れていた記録は残っておらず、英訳版の *Criminal Man* の出版自体も 1911 年（イタリア語の原著は 1876 年出版）であるが、遅くとも *The Secret Agent* (1907) — 作中で Lombroso の名が言及されるとともに、登場人物の描写に Lombroso の退化論が援用される — の執筆段階でかなり正確な知識を持っていたことは確かである。1895 年にはすでにフランス語版の（Conrad が英語よりも堪能であった言語である）*Criminal Man* が出版されているほか、イギリスでは Lombroso の理論に強く影響を受けた Havelock Ellis の *The Criminal* が 1890 年に、Max Nordau の *Degeneration* の英訳版が 1895 年に出版されている。

20. Wait の「黒さ」については、テクスト外でもこれまでさまざまな象徴的解釈が試みられてきた。例えば Ian Watt は “the fear of death” (106) を、Brian Shaffer は “incertitudes of life and death” (52) をそれぞれ読み取る。だが議論されるべきはむしろ「黒さ」の象徴する意味そのものではなく、「黒さ」という記号が、そのシンボルとしての曖昧さゆえに、多様な解釈を生成してしまうという事実である。その意味では、過去に試みられてきた解釈もまた、「黒さ」の記号的魅力によって誘引された一つのバリエーションに過ぎない。
21. ちなみにジャーナリズムに対して、Conrad は批判的な意見を述べていることが多い。“Autocracy and War” では、“there must be something subtly noxious to the human brain in the composition of newspaper ink” (76) と述べ、新聞が “the power to reflect and the faculty of genuine feeling” を人間から奪ってしまうことを批判している。

## 参照文献

- “Anarchism at Headquarters.” *Pall Mall Gazette* 17 Feb. 1894: 1.  
 Anderson, Linda R. *Wells and Conrad*. New York: St. Martin’s Press, 1988.  
 “Attempt to Blow up London Bridge.” *Pall Mall Gazette* 15 Dec. 1884: 10.

- Baines, Jocelyn. *Joseph Conrad: A Critical Biography*. London: Weidenfeld, 1960.
- Berthoud, Jacques. *Joseph Conrad: The Major Phase*. Cambridge: Cambridge UP, 1978.
- Boston, Ray. "W. T. Stead and Democracy by Journalism." Wiener, *Papers* 91-106.
- Brooks, Peter. *Reading for the Plot: Design and Intention in Narrative*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1984.
- Conrad, Joseph. "Autocracy and War." *Notes on Life and Letters*. London: J. M. Dent, 1921.
- . *The Nigger of the "Narcissus."* Oxford: Oxford UP, 1984.
- . Preface. Conrad, *Nigger* xxxix-xliv.
- . *The Secret Agent: A Simple Tale*. Oxford: Oxford UP, 1983.
- Costa, Richard Hauer. *H. G. Wells*. Boston: Twayne, 1985.
- Curtis, L. Perry, Jr. *Jack the Ripper and the London Press*. New Haven: Yale UP, 2001.
- Daly, Nicholas. *Modernism, Romance and the fin de siècle: Popular Fiction and British Culture, 1880-1914*. Cambridge: Cambridge UP, 1999.
- Delbanco, Nicholas. *Group Portrait: Joseph Conrad, Stephen Crane, Ford Madox Ford, Henry James, and H. G. Wells*. New York: William Morrow, 1982.
- DiBattista, Maria, and Lucy McDiarmid, eds. *High and Low Moderns: Literature and Culture 1889-1930*. New York: Oxford UP, 1996.
- Dryden, Linda. *The Modern Gothic and Literary Doubles: Stevenson, Wilde and Wells*. London: Palgrave Macmillan, 2003.
- "The Dynamite Explosion at Victoria Station." *Pall Mall Gazette* 27 Feb. 1884: 7.
- "The Dynamite Outrages." *Pall Mall Gazette* 10 Feb. 1885: 9.
- Edel, Leon, and Gordon N. Ray, eds. *Henry James and H. G. Wells: A Record of Their Friendship, Their Debate on the Art of Fiction, and Their Quarrel*. Urbana: U of Illinois P, 1958.
- "The Fear of Dynamite." *Spectator* April 14 1883: 477-78.
- "Foreign Sailors in British Ships." *Fairplay* 6 Mar. 1886: 142.
- Houen, Alex. *Terrorism and Modern Literature*. Oxford: Oxford UP, 2002.
- Jameson, Fredric. *The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act*. New York: Cornell UP, 1981.
- Kaplan, Carola M., and Anne B. Simpson, eds. *Seeing Double: Revisioning Edwardian and Modernist Literature*. New York: St. Martin's Press, 1996.
- Koss, Stephen. *The Rise and Fall of the Political Press in Britain: The Nineteenth Century*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1981.
- Laqueur, Walter. *A History of Terrorism*. 1977. New Brunswick: Transaction Publishers,

2001.

- Leavis, F. R. *The Great Tradition*. 1948. Harmondsworth: Penguin, 1993.
- Lee, Alan J. *The Origins of the Popular Press in England 1855-1914*. London: Croom Helm, 1976.
- Lombroso, Cesare. *Criminal Man: According to the Classification of Cesare Lombroso*. Trans. Gina Lombroso Ferrero. New York: G. P. Putnam's Sons, 1911.
- MacKenzie, Norman and Jeanne. *H. G. Wells*. New York: Simon and Schuster, 1973.
- Melchiori, Barbara Arnett. *Terrorism in the Late Victorian Novel*. London: Croom Helm, 1985.
- Miller, Hillis. "The Interpretation of *Lord Jim*." *The Interpretation of Narrative: Theory and Practice*. Ed. Morton W. Bloomfield. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1970. 211-28.
- Najder, Zdzisław. *Joseph Conrad: A Chronicle*. Cambridge: Cambridge UP, 1983.
- "The Outrages Applauded by Socialists." *Pall Mall Gazette* 26 Jan. 1885: 8.
- Parrinder, Patrick, ed. *H. G. Wells: The Critical Heritage*. London: Routledge and Kegan Paul, 1972.
- "Rossa's Weapons of War." *Pall Mall Gazette* 4 Feb. 1885: 4.
- Schalck, Harry. "Fleet Street in the 1880s: The New Journalism." Wiener, *Papers* 73-87.
- Shaffer, Brian W. "The Nigger of the 'Narcissus'." *A Joseph Conrad Companion*. Eds. Leonard Orr and Ted Billy. Westport: Greenwood Press, 1999. 49-64.
- Sherry, Norman, ed. *Conrad: The Critical Heritage*. London: Routledge, 1973.
- Smith, David C. *H. G. Wells: Desperately Mortal*. New Haven: Yale UP, 1986.
- Watt, Ian. *Conrad in the Nineteenth Century*. Berkeley: U of California P, 1979.
- Wells, H. G. *The Invisible Man*. Oxford: Oxford UP, 1996.
- Wiener, Joel H., ed. *Papers for the Millions: The New Journalism in Britain, 1850s to 1914*. New York: Greenwood, 1988.
- Woolf, Virginia. *Collected Essays*. Vol. 1. Ed. Leonard Woolf. London: Hogarth Press, 1966.
- . "Modern Fiction." Woolf, *Essays* 103-10.
- . "Mr. Bennett and Mrs. Brown." 1924. Woolf, *Essays* 319-37.

(いとう まさのり 関西学院大学准教授)